

明治期熊本における中国語教育 (2)

野 口 宗 親

Chinese Education in Kumamoto Prefecture in the Meiji Era (2)

Munehika NOGUCHI

(Received September 2, 2002)

I はじめに

本稿は「明治期熊本における中国語教育 (1)」¹⁾ に引き続き, 明治中期 (明治 20 年代) における熊本の中国語教育の状況を考察する。

明治中期において, 日中関係は壬午軍乱 (明治 15 年 [1882])・甲申政変 (明治 17 年 [1884])²⁾ や長崎における清国海軍水兵の暴行事件 (明治 19 年 [1886]) などを経て, 特に朝鮮の支配権を巡って悪化し, 東学党の乱を契機に日清戦争が起こった。福沢諭吉の「脱亜論」 (明治 18 年 [1885]) が出され, 当初中国・朝鮮との提携を目指したアジア主義も, 列強に対抗していくための中国改造主義 (アジア諸外国に対する優越性, 指導性が背景にある) などへと変質していく。

熊本においては, そのような日中関係に先鞭をつける形で, 国権論者・民権論者を問わず, 多くの人達が大陸に渡り, 「大陸浪人」「志士」などと呼ばれた。彼らは漢口の楽善堂や日清貿易研究所を拠点として活動し, 熊本でも日清貿易を扱う東肥合資会社という会社を設立した。日清戦争が起ると, 彼らの大部分が通訳官として戦地に赴いた。一方, 深刻な通訳官不足を補うため, 明治 28 年 (1895) 九州学院に速成の支那語学科が設置され, 民間でもちょっとした中国語ブームが起こった。

本稿では, いまだ必ずしも実態が明らかでない日清貿易研究所卒業の熊本出身者らが設立した東肥合資会社 (後の日清貿易東肥株式会社 [東肥洋行]), 九州学院に設置された支那語学科を中心に, 当時の新聞や雑誌を資料として, その設立の状況・実態を考察してみたい。

II 明治中期:九州学院³⁾における中国語教育

1 漢口楽善堂・日清貿易研究所・東肥合資会社

日清戦争が起こり, 戦争が中国本土に拡大していくにつれて, 中国語通訳者の不足が顕著となった。それに呼応する形で熊本では明治 28 年 (1895) 1 月, 九州学院に速成の支那語学科が設けられた。全国でも稀有な学校教育におけるいわば速成の「軍事通訳官養成科」である。その設置の背景には, 熊本の私学済々黌→漢口楽善堂→日清貿易研究所・東肥合資会社とつながる人脈 (いわゆる国権拡張主義を取る熊本国権党系集団⁴⁾) がそのすみやかな設置を可能ならしめたと考えられる。その流れをたどるために, 中国の漢口楽善堂や日清貿易研究所における熊本県人の

活動の状況を見ておきたい。⁵⁾

1) 漢口楽善堂

明治19年(1886)9月、済々黌に置かれていた支那語学科は廃止されたが、明治20年代に入ると、熊本からは済々黌で中国語を学んだ者を中心に、多くの人達が大陸に渡っていった。その状況について、肥後生稿「清国ニ於ケル肥後人」⁶⁾は次のように記している。

明治二十年春、宗方小太郎単身上海ヲ発シ、北清ノ各地ヲ経テ滿州ニ入り、十三省ノ地ヲ跋渉シテ華南ヨリ漢口ニ出テ、滿八ヶ月ニシテ上海ニ帰ル。邦人ニシテ車馬舟輻ノ便ニ頼ラス、僮僕従丁ヲ従エス、彼ノ内地及ヒ辺疆ヲ周遊セシ者ハ岐阜ノ中西正樹、宗方小太郎ヲ以テ嚆矢トナス。同年前田彪、広岡安太、井手三郎等前後ニ清国ニ航遊ス。明治二十一年春、緒方二三、片山敏彦、奥村金太郎、河原角次郎等又前後ニ渡航ス。同年夏、宗方小太郎熊本ニ帰り、佐々津田ノ諸氏ニ就テ、対清ノ方策ニ付キ計ル所アリ。同年八月、宗方松田満雄、佐野直喜、糸川直元、永原壮次郎、山田殊一、岡村正夫等ト共ニ、再ヒ清国ニ入ル。同年秋、宗方在上海樂善堂主岸田吟香ニ謀リ、北京ニ一店ヲ開キ、自ラ之ヲ管理ス。是時ニ方リ、在清方我県人ハ各地ニ在テ、他ノ各県ヨリ航遊ノ志士ト務テ氣脈ヲ通シ、大ニ力ヲ致セリ。尾張人荒尾精氏漢口ニ居ヲ定テ中原ノ形勢ヲ窺ヒ、傍ラ彼ノ政度ノ調査編纂ニ従事ス。井手三郎、緒方二三、片山敏彦之ヲ助ク。岩城人山内巖湖南長沙ニ在テ南方ノ事情ヲ探リ、福岡人高橋謙四川重慶ニ在テ西部ノ事ニ任シ、松田満雄、前田彪、広岡安太等之ヲ助ク。宗方小太郎ハ乃北京ニ在テ北方ノ勢形(ママ)ヲ觀察ス。明治廿二年四月、井手三郎漢口ヨリ陸路北京ニ到リ宗方ヲ助ク。而シテ別ニ長崎平戸人浦敬一ハ河原角次郎等二三ノ同志ト伊犁新疆地方ノ形勢觀察ノ任ニ當リ、漢口ヲ発シテ万里彼地ニ向エリ。当時我党ノ同志清国所在ノ要部ニ散居シ、互ニ聯絡ヲ取り、熱心規画經營百般ノ調査大ニ觀ル可キモノアリ。〔句読点と()は引用者。以下同じ〕

すでに明治17年(1884)、清仏戦争に際し、中国に渡っていた宗方小太郎・佐野直喜に続いて、続々と熊本県人が海を渡った。中国における彼らの活動のバックアップをしたのは上海に点眼薬「精錡水」⁷⁾などを売る楽善堂の支店を開いていた岸田吟香であった。さらに彼の援助のもとに荒尾精が漢口の楽善堂支店にのりこむに及んで、漢口を拠点に中国全土に対する調査活動は本格化・組織化されることになる(上文にも「形勢ヲ窺ヒ」「觀察」「調査」の語が盛んに用いられている)。荒尾精は愛知県出身、陸軍士官学校を経て、明治15年(1882)熊本第十三連隊付歩兵少尉として熊本に赴任、御幡雅文について中国語を学んだが、明治19年(1886)春、参謀本部より海外駐在課報武官として中国に派遣されていた。⁸⁾したがって漢口楽善堂は表向き商店であるが、のちの特務機関と課報部を合わせたような機能を兼ね備えていた。⁹⁾

明治21年(1888)初夏、漢口楽善堂には、

荒尾精(愛知・陸軍派遣将校)、石川伍一(秋田・興亜会支那語学校)、井深彦三郎(福島・一致英和学校)、荒賀直順(山形・東洋学館)、井手三郎(熊本・済々黌)、浦敬一(長崎・専修学校)、大屋半一郎(群馬・興亜会支那語学校)、緒方二三(熊本・済々黌)、片山敏彦(熊本・済々黌)、河原角次郎(熊本・大江義塾)、北御門松次郎(福岡・『近時評論』編集長)、黒崎恒二郎(岡山・上海楽善堂)、白井新太郎(福島・漢学塾)、高橋謙(福岡・東洋学館)、田鍋安之助(福岡・海軍軍医学校)、中西正樹(岐阜・外務省派遣留学生)、中野二郎(福島・東洋学館)、広岡安太(熊本・漢学塾)、藤島武彦(鹿児島・同人社)、前田彪(熊本・済々黌)、松田満雄(熊本・済々黌)、宗方小太郎(熊本・同心学舎・東洋学館)、山内巖(福島・東洋学館)、山崎恙三郎(福岡・福岡中学校・玄洋社)

等の二十余名が集まった。いわゆる漢口会議と称されるものである。彼らは「陸軍当局に報告課

報」することを前提に、「露国の将来西比利亞（シベリア）鉄道に依りて支那方面に勢力を伸長するを、絶対に防遏の策を施し置きて、一面には遅くも十年以内に、支那の改造を實行すべきこと。」などの幾つかの行動方針を決定し¹⁰⁾、漢口・北京・長沙・重慶・四川などに分かれ、中国各地の「人物、土地、被服、陣営、運輸、糧食薪炭、兵制、造船所、山川土地の形状、人口の粗密、風俗の善悪貧富」などの項目について偵察活動に赴いた。ここに中国における日本人による最初の本格的な調査活動が開始された。

漢口楽善堂に集まったメンバーを出身地域別で見ると、熊本、福岡、福島（もと会津藩）が多いのは国権主義・対外強硬論の強い地域であることとも関係があるかもしれない。中でも熊本県人が8名と最多であり、主力となっている。うち6名は済々黌関係者で、支那語学科で御幡雅文らに中国語を学んでいる。荒尾精とは熊本時代の縁で集まり、協力したものであろう。彼らは「清国ニ於ケル肥後人」に「宗方小太郎熊本ニ帰り、佐々津田ノ諸氏ニ就テ、対清ノ方策ニ付キ計ル所アリ」¹¹⁾とあるように、佐々友房らの紫溟学会（その世務部が熊本国権党）系の人達（熊本国権党系集団）である。

熊本県人8名のうち、井手、緒方、片山、前田、宗方の済々黌関係者5名の略歴は前論文(1)で述べたので、ここでは河原、広岡、松田の3名の略歴を述べる。

1 河原角次郎 資料によっては角次郎の角は覚・格、次郎は太郎となっている。のちに林と改姓した。玉名郡築地村（現岱明町）出身。明治18年2月3日徳富蘇峰の大江義塾に入校。同年4月以降は月謝が納入されていない。宮崎滔天・宮川辰蔵らと親しかった。（花立三郎『徳富蘇峰と大江義塾』ペリかん社、昭和57年、285頁。上村希美雄『宮崎兄弟伝日本編下』葦書房、昭和59年、173・174頁）

2 広岡安太 1868～1889、明治元年に熊本に生る。藩儒生駒氏の門に学んだが、明治19年、清国に渡って馮国鈞の家に寄寓し中国語を学習。漢口楽善堂の荒尾精のもとに至り、石川伍一・松田満雄とともに、四川の重慶に行き、楽善堂四川支部の開設に参加した。明治22年、貴州・雲南の苗族調査に赴き、杳として行方知れずとなった。年22歳であった。（『対支回顧録』下巻498頁に伝）

3 松田満雄 1862～1924。熊本藩士の子で、熊本市池田町に生れ、同心学舎（済々黌の前身）に学んだ。志を立て清国に渡り、漢口楽善堂の荒尾精のもとに至り、石川伍一・広岡安太らと四川省の調査を担当した。日清・日露戦争で陸軍通訳。明治31年東肥洋行を経て、清国政府郵伝部尚書の盛宜懐と知り合い、その関係から大冶鉄鉱を八幡製鉄所に供給する橋渡しをした。後に満州蘇家屯に移住、大正13年当地で没した。年63歳。（『対支回顧録』下巻496頁に伝）

漢口楽善堂は明治23年（1890）、日清貿易研究所の設立に奔走するため、荒尾精が帰国して中心メンバーが去ると、明治25年（1893）には逼塞状態におちいり、翌年には解散を余儀なくされるに至った。¹²⁾

2) 日清貿易研究所

「清国ニ於ケル肥後人」は前文に続けて次のように記述する。

明治二十三年荒尾氏漢口ヨリ東京ニ帰り、日清貿易研究所創立ノ計画ヲナシ、全国ニ向テ遊説シ、生徒百五十名ヲ募集シ、同年九月上海ニ在テ研究所ヲ設立ス。宗方小太郎入テ幹事評議員ト為リ、賛襄スル所多シ。此時熊本人ニシテ募集ニ応シ、生徒トナル者十三人。此外片山敏彦、三池親信等或ハ教授ヲ助ケ、或ハ会計ヲ掌リ、力ヲ致スモノ尠（すくな）カラス。鳥居赫雄荒尾氏ト交アリ。同シク研究所ニ在リシモ、病ノ故ヲ以テ半途ニシテ帰国セリ。

荒尾精は先に述べたように、軍事偵察を目的とする参謀本部の清国派遣将校として、漢口楽善

堂に赴任した。そして自らの貿易活動や探偵活動の中から清国との経済・通商活動の重要性を認識し、単なる軍事探偵だけでなく、西欧諸国と競い、日本を富強にすべく、日清貿易商会構想を抱くに至った。すなわち一大商会（東方通商商会）を創設し、その下に付属の人物養成の機関を置いて、組織的に対中経営を行おうというものであった。

明治22年（1889）4月、荒尾は漢口から日本に帰り、志願して陸軍大尉の軍籍を脱し、構想実現のために朝野に遊説した。しかし、資金の関係で、商会の設立は後日にまわし、第一段階として、日清貿易振興のための人材養成機関である日清貿易研究所を上海に設立することにした。その資金すら困難の連続で、川上操六参謀次長らの助力により、内閣機密費から4万円が支出されることになり、ようやく開校にこぎつけた。

明治23年（1890）9月8日、荒尾は全国から集まった500人の中から学生150人を選抜、彼らを引率して上海に到着、英租界競馬場近くの憶金里の研究所に入った。研究所には熊本からは宗方小太郎（幹事）、片山敏彦、三池親信らが教授や校務を助けた。また荒尾精の熊本時代の先生で、中国語教育の大家御幡雅文も呼び寄せた。

日清貿易研究所には九州から多くの学生が入所し（総数の約半数）、熊本からは福岡の18名に次ぐ、15名の合格者を出した。熊本からの合格者数については従来「清国ニ於ケル肥後人」により13名とされていたが、『九州日日新聞』明治23年（1890）7月9日の記事「日清貿易研究生合格者」によると、

松倉善家、石原朝平、小山平次郎、井口忠次郎、池部秀二、岩崎重平、岡部喜三郎、川村時彦、牧相愛、赤峯邦弥太、右田亀雄、武藤岩彦、岡部猪一郎、橋爪弘、一名未詳の15名となっている。佐々博雄氏が「日清貿易研究所第一学期試験成績表」などにより作成した「日清貿易研究所学生名簿」（明治24年3月現在）に拠ると¹³⁾、下線部の名前はなく、代わりに勝木恒喜、古庄弘、藤城亀彦、深水十八、本島正礼の5名の熊本出身の名があり、同じ15名ながら出入りがある。合格しても渡清しなかった人、後に参加した人などがあるためであろう。なお、ジャーナリストとして有名な鳥居赫雄（素川）も日清貿易研究所に入所したが、数ヶ月で病氣となり、帰国している。熊本人のうち、小山平次郎、井口忠次郎、池部秀二、川村時彦、牧相愛、赤峯邦弥太、右田亀雄、古庄弘、藤城亀彦、深水十八、本島正礼、鳥居赫雄（素川）ら12名もの圧倒的多数が済々黌出身者である。済々黌→漢口楽善堂→日清貿易研究所とつながる太く、拡大していく人脈を見ることができる。荒尾精や宗方小太郎もこの頃、盛んに済々黌や九州学院で講演をして生徒に働きかけている。

○明治21年（1888）7月11日 正午済々黌の要請に応じ学生に対し清国遊歴中のことを談ず。…夜済々黌察監岡本の処に至り済々黌の学生20余名も来り、余の中国の経歴を聞く。（馮正宝『宗方小太郎伝—大陸浪人の歴史的役割—』、熊本出版文化会館、1997年、67頁〈宗方日記摘録〉）

○或時津田先生の御紹介で、日清貿易研究会主唱（後の東亜同文書院）荒尾精氏の支那談を聴き、又或時、井芹先生の御紹介で宗方小太郎氏の支那内地旅行談を聴きましたが、…（『多士』済々黌創立五十周年記念号、昭和7年7月、277頁。明治22年同窓生木村亥熊寄稿）

済々黌や九州学院で彼らの講演を聞いて、中国に渡った若者も多かったと思われる。

日清貿易研究所は日清貿易振興のため、実務に従事する人材の養成を目的とした教育機関（学校）である。授業科目は、商業教育（商業地理・支那商業史・商業算術・経済学・法律学・商業実習）と言語教育（清語学・英語）がおもで、それに一般教養（和漢文学・作文・習字）と兵式体操があった。当然ながら、清語学が週12時間も開講され、北京官話以外にも上海語も教えられていた。¹⁴⁾ 修養年限は3ヶ年であるが、別に商業実習2ヶ年が用意され、日清商品陳列所（瀛

華広懋館)を上海河南路に設け、卒業生を実習させた。

明治26年(1893)6月、日清貿易研究所を卒業して¹⁵⁾、日清商品陳列所に入所予定の熊本県人は、九州学院の同窓会誌『高原』第2号(明治26年8月2日、29頁)によると、「日清商品陳列所員諸氏…当所〔日清貿易研究所〕在学の諸氏は本年6月を以て無事に其全学課の修業を卒へ、各々帰朝の途に就きたりき。而して本年々末頃迄には再び清国に渡清し、実務練習の爲め、日清商品陳列所員となり、尚二年間業務を習熟せんとす。然るに我同窓生森川省三郎、深水十八、川村景敏、藤城亀彦、牧相愛、本嶋正礼、小山平次郎の六氏〔ママ〕(日清陳列所員の中、熊本県人は総計十二人)此中にあり。実に悦ぶべきにあらずや」とあって、総計12名であったようだ。

この中国における日本人経営の本格的な学校も、一期生を送り出しただけで、明治26年(1893)6月閉鎖した。40名ほどが入所した日清商品陳列所も、日清戦争が起こるや、明治27年(1895)8月、一切の保管を英人に託して上海を引きあげて帰国、閉鎖された。日清貿易研究所の熊本出身の卒業生の中で、卒業後中国語教育に携わった者に、牧相愛がいる。

1 牧相愛(まきすけちか) 1872～1908。熊本藩士牧相之の長男として、熊本市京町に生れる。濟々鬢に在学中、上海日清貿易研究所の創立を聞き、これに入学。日清戦争で従軍通訳となり、戦後明治30年京都市立商業学校で中国語を教えた。日露戦争で再び通訳として従軍、戦後は鹿児島県立商業学校教諭となり、再び中国語教育に従事、在職中明治41年死去した。その間中国語教科書『燕語啓蒙』(若松書店、明治32年)を出し、また別に写本『燕音集』(明治33年)がある。西島良爾と共著で『支那語官話字音鑑』(明治35年)も出している。(六角恒広『中国語教育史』、東方書店、1988年、310頁。『対支回顧録』下巻631頁に伝)

3) 東肥合資会社と日清貿易東肥株式会社(東肥洋行)

「清国ニ於ケル肥後人」はさらに次のように記述する。

同年(明治26年)八月宗方ハ熊本ニ帰り、日清貿易研究所卒業生武藤巖彦、松倉善家、深水十八、牧相愛、井口忠次郎、岡部喜三郎、岩崎博隆、勝木恒喜、右田亀男等ト謀リ、県下官民ノ協賛ヲ得テ数万ノ資ヲ籌出シ、清国漢口ニ本店ヲ置キ、熊本ニ支店ヲ開キ、盛ニ貿易ヲ営ミ、以テ他日大有為ノ基礎ヲ確立セントス。緒方二三カヲ協テ奔走セリ。

熊本に帰った日清貿易研究所の卒業生(武藤巖彦、松倉善家、深水十八、牧相愛、井口忠次郎、岡部喜三郎、岩崎博隆、勝木恒喜の8人)と宗方小太郎、緒方二三らが協力して設立しようとしたのが、日清貿易を扱う東肥合資会社である。東肥合資会社の設立状況について、その指導者であった緒方二三は次のように回想している。¹⁶⁾

明治二十三年頃の日清貿易研究所といふ学校が、上海に在る荒尾精氏の努力によって建設されたのであります。そこに熊本県人が七、八人居り、二十五年(ママ)の春卒業した。それ等の人々を糾合し協議した結果、日清貿易会社を創設する計画を立てるに至ったのであります。私はその卒業生ではなかったけれども、一番年長者であったのでその指導的立場にあったわけです。当時熊本では日清貿易と言っても到底耳を傾けるものなどは全く皆無でありました。…先生(佐々友房)は当時の県知事であった松平正直といふ人に、この事業の如何に国家的に有益であるかを熱心に説いて彼を動かし、そして当時の商業会議所会頭たる岡崎忠(ママ。唯)雄さんを勧誘し、その人を社長に推挙し得るに至ったのであります。そして着々とその実行に取りかかり、漢口に本社を置いて、その事業所を熊本、上海に設け、支那品を熊本に売るといふ企てであったのであります。ところがその計画が思はぬところで挫折しました。丁度日清戦争の機運が到来し、上海で家を借り着々準備中の我々も遺憾乍ら涙を

呑んで熊本に引き上げざるを得なくなり、我々同志の多くは従軍するに至ったのであります。戦争も目出度く我国の勝利となり、今度は世間も漸く支那に関心を持つに至ったので、大仕掛けの仕事をする事となり、当時資本十万円を以て、明治二十九年に東肥洋行の成立が出来た訳であります。斯くて事業上の事柄に就き、色々と先生のご指導とご援助を受けて、上海、沙市を出張所として、漢口と熊本に支社を設けていよいよ営業を開始した訳であります。

これによると、東肥合資会社設立には、国権拡張、対外強硬を表明し、実業殖産の振興に力を入れていた佐々ら紫溟学会の強力な後押しがあったことがわかる。彼らが推進し、築港させた三角港を対清貿易に積極的に活用しようという意図もあった。

緒方二三の回想によると、東肥合資会社は計画の段階で挫折し、その構想の実現は明治29年の日清貿易東肥株式会社（東肥洋行は清国での名前）であるととれる。佐々博雄氏も「この東肥合資会社（東昌洋行）設立計画は挫折した」としている。¹⁷⁾

しかし、東肥合資会社は明治27年3月（熊本支店）・4月（漢口支店）の開業以来、明治29年8月8日の日清貿易東肥株式会社（東肥洋行）発足まで、継続して営業を行っていたようである。東肥合資会社の設立から日清貿易東肥株式会社の発足までの事柄を新聞記事で調べてみた。（新聞名がないのは総て『九州日日新聞』、●は見出し、*は筆者がまとめたもの。記事の句読点は引用者。以下同じ）

○明治26年9月21日 ●東肥合資会社起る *「東肥合資会社」の設立主旨を発表。資本金5万円、社長は熊本商工会議所会頭の岡崎唯雄、発起人は日清貿易研究所の卒業生の上述の8人。

○明治27年2月23日 ●東肥合資会社総会の決議 *総会を開催、漢口本店を来る四月下旬、熊本支店を来る三月下旬に開店することを決定。

○明治27年3月18日 ●東肥合資会社の近況 *「同社開店の準備」と「支那貨物の着熊」について。熊本支店は東唐人町同社事務所をあてる。同所に販売所を設ける。●事務所員の旅行 *牧相愛、岩崎博隆が渡清、北清の商況を調査して、漢口本店に、高道武雄（玉名の人で、在上海横浜正金銀行員）を相談役にする。

○明治27年4月11日 *日清貿易東肥合資会社の支那諸雑貨販売広告、6月14日・16日にも広告。

○明治27年5月20日 ●東肥合資会社の近況 …又た熊本支店内の支那物品販売所は一般の好評を得て顧客日に多く、為めに清国より汽船の入港ごとに続々荷物の到着する物品も、四五日を出でずして売切る有様なりと。

○明治27年11月10日 ●大本营より召さる 当地の東肥合資会社社員松倉善家、深水十八、右田亀男、勝木恒喜、井口忠次郎、平山氏清、牧相愛の諸氏及び片山敏彦、藤森茂一郎の二氏は大本营より至急出頭すべき旨召出しありしを以て、明早朝当地を發して広島に赴く筈なり。…又井手三郎、緒方二三の両氏は既に過般来広島に赴き居たることなれば該地に於て召状を受けしならん。…就ては東肥合資会社は能く其事務を整理し、第一回の報告を株主に為し、跡の万事は二三の社員に引き継ぎ依然其業を営む筈なりと云。…

○明治27年11月22日 ●東肥合資会社第一回報告 日清貿易の目的を以て当地に起りたる同会社は…漸く四方の信用を得、其の貨物の売れ行き日を追ふて盛大に赴きしが、図らずも今回日清の開戦は直ちに同社に大影響を及ぼし、独り其の貨物を直接に清国より取り寄するの道を杜塞せしのみならず、社員諸氏も亦た皆な牙籌（注：計算の棒）を投じて戎馬の間に奔走せざるを得ざるに至りしかば、…其の發するに臨み、開業以来五箇月間の経営及び収支を精細に調査し、第一回報告書を作り、之を同社の株主に分てり。其の雑貨店の決算を見るに左の如し。雑貨店は其の資本として金一千八百六十四円一錢五厘を受け込み、…配当の割合は年一割三分強にして、当期五ヶ月に配布せり。而して我熊本

に在る諸会社の配当に比し、遜色あるを見ざるは事務員等が社員諸氏に対し、稍々以て面目を保つを得る所なりと。

○明治 28 年 1 月 29 日 熊本新聞 ●東肥合資会社の大割引 *記事略。

○明治 28 年 10 月 27 日 ●深水十八氏の渡清 東肥合資会社員深水十八氏は明日頃より当地出発、清国に渡航し同会社の貨物仕入れをなし、兼て新開港場を視察すべしと。

○明治 28 年 12 月 9 日 熊本新聞 広告 百貨新着 品ハ上等ニシテ価ハ低廉ナリ。正直ヲ本トシテ懸価懸引ナシ 反物ニハ黒縹子、紋縹子ヲ始トシ、… 十二月一日 熊本市東唐人町 東肥合資会社事務所支那雜貨販売所

○明治 29 年 4 月 24 日 ●東肥会社発起会 日清貿易東肥株式会社発起人会は一昨日午後一時より開会…続いて岡崎氏会頭席に着き、議事に掛り二三修正の上左の如く議決したり。…創立委員及び常務委員当選者は左の如し。松崎為巳、岡崎唯雄、下田耕造、大田高宏、石坂清四郎、有働格四郎、宮崎真三(以上創立委員)岡崎唯雄、有働格四郎(以上常務委員) ●東肥会社の株主 *発起株二十株以上の者(31名)の中に、平山氏清、深水十八、松倉善家、緒方二三、藤森茂一郎、井口忠次郎、牧相愛、山賀喜三郎、勝木恒喜の名がある。 ●合資会社の決議 前項日清貿易東肥株式会社発起会に於て東肥合資会社員は別に種々同社の事に関し、協議する所あり。結局左の決議をなせり。(1) 東肥合資会社を日清貿易東肥株式会社創立の上は之に譲渡すこと。(2) 既払込金額は会社譲渡と同時に株式払込金に転換すること。…

○明治 29 年 8 月 9 日 ●日清貿易東肥株式会社創業総会。 * 8 月 8 日開催、新町忘吾会舎にて。

このように東肥合資会社は計画倒れで終わったのではなく、実際に熊本市東唐人町に店舗(雜貨店)を置き、かなり繁盛したようである。そして日清戦争を挟んで約二年半営業を続け、日清貿易東肥株式会社に移譲した。したがって、この間も漢口楽善堂・日清貿易研究所と続く人脈はここを拠点として対中国活動に活発に動いていたことがわかる。後述するごとく、日清戦争中にもかかわらず九州学院の速成支那語学科の講師に会社から 2 名を派遣したのもその表れである。

日清貿易東肥株式会社は規模を大きくし、資本金 10 万円をもって、明治 29 年(1896) 8 月 8 日に創立。熊本に本店(三池親信)、大坂(深水十八)・上海(松倉善家)・漢口(緒方二三)・沙市(松田満雄)などに支店や出張所を設けた。『対支回顧録』下巻、539 頁)当初、経営は順調であったが、次第に資金難に陥り、明治 33 年、熊本の第九銀行支払い停止に始まる銀行恐慌の影響を受け、結局、明治 36 年(1903) 8 月 31 日の株式総会において解散した。

2 九州学院における中国語教育

熊本において日清戦争時に通訳官養成の速成支那語学科を設置した学校名を濟々鬘、熊本文学館とするなど諸書に間違いがある。¹⁸⁾ 事實は九州学院文科に置かれたのであるが、明治 24 年(1891) 10 月、濟々鬘(普通学部)・熊本文学館(文学部に)・熊本法律学校(法学部に)、春雨鬘(医学部に)の四校が合併して職員 60 名、生徒数およそ 1000 名の総合的私学である九州学院が設立されたものの、たった 3 年~6 年の間に分離(明治 27 年、普通学部が分離して熊本県尋常中学濟々鬘へ)・解体・閉院(明治 30 年 3 月 31 日)したため、後の関係者が混乱、記憶違いをしたものと思われる。

明治 27(1894) 年 8 月 1 日、日清戦争が起こり、戦線が朝鮮から中国本土に拡大していくと、戦争の長期的展望を持っていなかった軍部は深刻な中国語通訳者不足に悩んだ。『兵要支那語』(近衛第一旅団)、『日清会話』(参謀本部)など中国語の教科書を発行したが¹⁹⁾、緊急には間に合わない。そこで全国的に通訳者を募集した。その間の状況を佐々博雄氏は次のように述べる。²⁰⁾

さて、日清戦争に従軍した通訳者の数と質は、戦争の局面によって変化した。戦争当初の朝鮮における作戦に置いては朝鮮語の通訳が採用された。この通訳者には居留邦人や釜山にいた対馬警備隊の兵士などがあたり、その合計は、二一四名であったとされる。一方、清国における作戦においては清国語通訳者が必要であった。……このように、清国語の通訳者の召集については、十分な準備がなされておらず、大本営においても混乱があったようで、結局、かつて参謀本部員として清国に駐在していた歩兵大尉小沢徳平を、その担当責任者として召集を統括させたのである。

また、召集の状況については、「従来清国ニ来往セシ邦人ハ、開戦当初奮テ通訳ノ任ニ当ラント欲シタルカ故ニ、第一軍ノ編成頃迄ハ供給充分ナリシ」と、開戦当初から九月一日の第一軍編成頃までは、通訳者の供給も充分で、召集も順調であったが、「第二軍編成以後ハ招募シテ始メテ一次ノ急ヲ救ヒ、十一月頃ハ通弁ノ稍々不十分ナル者スラ採用セサルヘカラサルニ至レリ」と、一〇月三日の第二軍編成以後、募集によって、なんとか急場をしのいでいた状況も、とうとう、金州城を攻略した11月頃になると、未熟な通訳者も採用せざるを得ない事態になったと述べている。さらに、翌明治二八年の近衛師団、第四師団の派遣の時期には、深刻な通訳官不足となり、清語学科をもっていた熊本の九州学院（明治二四年一〇月、熊本市内の済々黌をはじめとする四私立学校が合同した学校）の学校生徒へも速成教習をおこない、四〇余名を通訳官として採用したとしている。このようにして召集した通訳官の総数は、少数の英語通訳を含み、概ね二七六名であり、彼らは、通訳業務の他、翻訳、情報収集、捕虜の取り扱い補助、占領地における民政の補助などの職務をおこなった。また、通訳官の戦死者は一二名、病死者九名とされている。

次第に通訳官不足が顕著となり、九州学院での速成教習にまで頼らざるを得なくなった状況を参謀本部自体が認めている。ただ、九州学院が清語学科をもっていたとするのは不正確で、明治28年（1895）1月になって、九州学院文科の別科として支那語学科を急遽新設したとするのが正確である。

なぜ全国で唯一九州学院だけに速成の「軍事通訳官養成科」が設置されたのであろうか。ここでは上記のような戦時の状況、通訳不足に関し、熊本県ではどのような動き（対応）があったのか、九州学院での支那語学科の設置の状況も含め、おもに当時の熊本の新聞（『九州日日新聞』、『熊本新聞』）の記事や九州学院の校友会誌『錦溪』を資料に、それを年表風にならべ考察していくことにする。

○明治24年10月30日 九州学院開校。

九州学院は天皇中心主義・国権主義を標榜する紫溟学会が教育機関として、その系統にあった済々黌・熊本文学館・春雨黌・熊本法律学校の四私立学校を統合して創設した巨大私学である。²¹⁾九州学院が日清戦争に際し、中国語通訳者の養成を急遽引き受けたのも、済々黌に明治19年（1886）まで支那語学科を置き、「その書生を中国各地に『散布』²²⁾させた創立者佐々友房（国権党の指導者）らとつながる人脈が背景にあることを容易に想像させる。

○明治27年8月1日 清国に宣戦布告。

○明治27年8月5日 九州日日新聞 ●我公使帰朝 小村北京駐在公使代理は本日帰朝の途に就けり。清国在留の日本人は米国公使の保護に託せり。

○明治27年8月24日 九州日日新聞 広告 曾て清国に遊び今は当地に在る者旧来懇親会を開くの例あり、依て本例に従ひ来る廿六日午前八時、成趣園（水前寺）に於て同会を開かんとす。曾遊同感の諸士来会あれ。但会費三十銭当日の持参事。発起人 井手三郎・緒方二三

○明治27年9月17日 連合艦隊黄海海戦に勝利。

○明治27年9月20日 九州日日新聞 ●支那語を能するもの 飽田列郡役所の所轄内に於ては単に

支那語を能するのみならず、大ひに清国の事情に精通する者ある由にて、頃来取調べ居たるに、夫々結了せしを以て、昨日調書を其筋に進達したるが、其人員は七八名ありと云ふ。

○明治27年10月9日 九州日日新聞 ●破格を以て拝謁を賜はる (宗方小太郎氏の光栄) *10月5日午前11時大本営にて天皇に拝謁

日清の戦争が始まろうとする険悪な日清関係のもと、大多数の日本人は帰国し、日清商品陳列所も閉鎖を余儀なくされた。しかし、一部は特務を帯びて中国に在留し、危険をおかして中国軍の動向を密偵した。「軍事探偵」として名を馳せた宗方小太郎や松田満雄らがそうである。その成果を賞され、宗方は広島大本営にて、中国服を着て天皇に拝謁した。中国軍につかまり、殺された人もいた。一方、熊本では8月24日の記事にあるように、井手三郎・緒方二三らが、もと清国在留者に呼びかけて、盛んに団結・協力しようとした状況や、行政においても9月20日の記事より、組織的に中国語・中国事情に通ずる者を召集していたことがわかる。

○明治27年10月17日 九州日日新聞 ●通訳官百余名に達す …是迄は朝鮮語に通ずる者最とも軍務に必要なりしが、今後は支那語に通ずる者なかるべからず。依て大本営に於ては過般来、支那語の通訳官を募りたるが、最早今日まで採用せられたる者百余名に達せり。従来洋語は世人の競ふて学習せし所なるも、支那語に至ては之を修めたる者尠く、之を修めたる者は皆な時流の外に立て、別に一隻眼有し、将来清国に向ふて為すあらんと志を抱き居たるが、時期未だ有為の秋に会せず、徒らに鬱勃の気を抑つて自から時の至るを待ち居たる者尠からざれば、何れも踊躍して四方より集まり来りたるものにて、従来支那語を修め支那に遊びたるものは多く此に集まり居れり。尤も此のうち支那語に精通するものあり、亦た然らざる者あれとも、恰かも維新後欧語大ひに流行し、少しく欧語を解する者は皆な好位置を得たと一般、皆一様に厚遇を受け居れりと、広島書信の端に記せり。 ●通訳官に採用されし本県人 本県人にして今回支那語の通訳官に採用せられたるは左の諸氏なり。佐野直喜、藤城亀彦、元(ママ。本)島正礼、柳原又熊、篠原由雄(以上第二軍附)奥村金太郎(第一軍附)

○明治27年11月10日 九州日日新聞 ●上林氏の出発 熊本郵便電信局在勤の上林大三郎氏は嘗て支那語を修め、熟達する所ありし人なるが、今回大本営より急電を以て召出されたるを以て、昨日一番列車にて当地を出発し、広島に赴けり。 ●大本営より召さる *東肥合資会社員11名の召集。本稿1の3)東肥合資会社の項参照。

○明治27年11月17日 『錦溪』第18集(明治27年11月30日, 32頁) ●片山浩然先生の従軍 *片山浩然(敏彦)は九州学院文科教師、第二軍の通訳官として

○明治27年11月21日 旅順港占領。

○明治27年12月18日 九州日日新聞 ●通訳官拝命 *九州学院文科出身の井上良蔵、佐竹令信の二人。第六師団附通訳官として。山東省の一角に上陸(『錦溪』第19集にも記事)。

○明治27年12月19日 九州日日新聞 ●藤城亀彦通訳官戦死の公報

10月17日の記事では、朝鮮語に続いて、中国語通訳者が必要とされるにつれて、西欧語に対し不遇をかこっていた中国語の経験者がわが世の春が来たとはばかり、勇躍して集まってきたことが、皮肉もこめて書かれている。当時、中国語学習者が一般に「之を修めたる者は皆な時流の外に立て、別に一隻眼有し、将来清国に向ふて為すあらんと志を抱き居たる」と特別視されていたことがわかる。戦争が激しくなるにつれ、通訳官が各地から召集され、10月17日の記事では、それが百名に達していた。

○明治28年1月6日 九州日日新聞 ●九州学院の拡張 熊本尋常中学済々黌の兄弟分なる九州学院には今般時勢を測り、其文学部の別科として朝鮮語支那語の二科を置き、希望者には格別の寛路を與

へて速成実用を努むる由。又学院部内に武科の一科を設け、専ら陸海軍候補生の予備科となし、…共に当時出願中なれば許可の上は順次実施を見るに至るへし。而して該学院が続々応用の人物を出す期して待つべきなり。

○明治28年1月17日 熊本新聞・九州日日新聞 広告 支那語学生募集広告 今般本校に於て支那語学科を設置し、学生を募集す。年齢十五年以上三十年未満にて、志願の者は無試験入学許可候條。願書に履歷書を添へ、本月二十五日迄差出あるべし。但願書には熊本市内住居者の保証を要す。

明治廿八年一月十五日 九州学院

○明治28年1月18日 九州日日新聞 ●通訳官卅七名に上る 今回征清事件に関し、通訳官に任せられたる熊本県出身の者は都合卅七名に上りたり。其多く通訳官を出だせしこと全国第一等に位せりと云ふ。是れ本県志士の夙に支那に着眼し、天下に率先して支那語を学習せし者多きに由るなり。愉快と云ふべし。●広島短信 井手三郎、深水十八の両氏は去十日、他の八名と小倉丸にて直行大連灣に赴き、是より岫巖なる第一軍司令部へ赴むく（陸路旅行）筈なり。猶ほ鳥居素川も員外通訳官として日本新聞通信を兼ね、同十日出発田鍋氏も同行。…

○明治28年1月19日 九州日々新聞 ●清韓語を修むるの必要 …若夫れ支那語に通ずる者に至りては猶ほ其の尠きを見る。今回の征戦に於ひて、全国の人略は支那語に通ずる者は皆な挙げて通訳官と為し、亦た殆んど遺すことなし。而して其通訳官の数は二百名内外に過ぎざるなり、…然れども清韓語を修めんと欲するも、之を教授するの場所なきときは、亦た如何ともするを得ず、…現に当地の九州学院の如き、將に日ならず之を実施せんとし既に其修学志願者を募集せり…

○明治28年1月20日 九州日日新聞 ●支那語に通ずる者の必要 …故に大本營に於ても猶ほ民間に支那語を能くするものあらば、其技能に応じて之を採用せらるる筈の由なるも、今は全く其人物を見出さざるに至れりと云ふ。… ●支那語学生速成科を設く 兼て諸新聞にも広告せる通り、九州学院にては今度支那語の一科を設け、最も速成の目的を以て教授する筈にて、来る二十五日まで入学希望者の出願を受け、翌二十六日より直ちに授業を始め、其修学期限は三ヶ月半と定め、一日の授業時間は三時間とせり。担当教師は日清貿易研究所に於て支那語を修め、目下東肥合資会社の事務を担ひ居る山賀喜三郎氏也。目下の時勢支那語に通ずる者の必要最も切なるは人の皆知る所なり。一日も速かに支那語学生を養成するは一日の利益あるを以て、普通の教授法に依れば多くの歳月を要するも、此際同院に於ては最も簡便の法に依りて速成の目的を達するの積りなるが、山賀教師も亦た戦地に従軍したると同一の覚悟を以て非常の勉強を為し、必ず此の三ヶ月半の期限内に於て普通の言語には通し得る程の学生を養成せんと奮発し居る由なれば、其結果必ず見るべきもの有り。濟々たる多数有為の学生相率て輩出するならん。

○明治28年1月25日 九州日日新聞 ●支那語学志願者 今度九州学院内に支那語学の一科を設け、明二十六日より始業することとなり、本日まで其の志願者を募集せるが、今（い）ま昨日迄の志願者を見るに、既に四十余名に達し、猶ほ昨今続々出願あり。而して其の志願者の多数は長年にして漢学の素修あるものの如き由なれば、其の進歩も早かるべし。又た授業時間は毎日午後三時より六時まで都合三時間なれば、他に事業に服し居りて其余暇修業せんと志す者あり。或る一人の如きは毎日三池より電車にて通学せんと云ひ居れり。其他下益城郡隈庄地方より毎日通学すると云ふものあり。修業の後（の）ちは通訳官の試験に応じて身を軍事に致さんとの志を抱く者もあり。或ひは他日商業を営まんとの目的を有する者もあり。前垂筒袖にて志願書を携へ出校せる者なども見受たりと云ふ。其支那語熱の如何に当地に熾（さか）んなるを見るべし。…

○明治28年2月1日 熊本新聞 ●支那語学生 先般九州学院内に支那語学科を設け、生徒を募集せしに、時節柄入学者非常に多く、目下の現在生徒数は二百余名の多きに達し、豫定の教員にては授業

上不十分の憾なきにあらざれば、尚ほ近々小倉より二名の教員を聘し、一層盛大に為さんとの計画なりと云へり。

○明治 28 年 2 月 2 日 威海衛軍港占領。

○明治 28 年 2 月 5 日 九州日日新聞 ●通訳官の募集 大本営に於ては今回支那語に通ずる者を試験の上採用することを広告せられたり。聞く戦鬪益々擴張するに付き兵站部も加はり其他に付き、通訳官の入用甚だ盛んにして、今度また第一軍及第二軍より三十名と五十名との通訳官を派遣すべき旨申し来りたるも、大本営にては悉とく其求に応ずるを得ざるに苦しめりと。其広告を以て募集するに至りしは之れか為めなるべし。

○明治 28 年 2 月 24 日 九州日日新聞 本県出身の通訳官 客月末大本営の名簿にある通訳官の総数は二百二十四名にして、内九州出身は、熊本三十七名、福岡三十名、長崎十九名、鹿児島十五名、佐賀十三名、大分五名、宮崎四名なり今 (い) ま本県出身通訳官原籍及び所属を記さんに

藤本親信、奥村金太郎、高道梅雄、糸川直元、井口忠次郎、右田亀男、八木茂、栗林次彦、(以上第一軍附)、深水十八、井手三郎 (以上第一軍安東県民政庁附)、佐野直喜 (第二軍測量班附)、本島正礼 (皮子窩兵站部附)、藤城亀彦、武藤巖彦、熊谷直亮、井原真澄、柳原又熊、篠原由雄、徳丸作蔵、藤森茂一郎、牧相愛、松倉善家、井上良蔵 (以上第二軍附)、岩崎博隆 (第二軍混成旅団附)、片山敏彦 (第二軍金州民政庁附)、鳥居赫雄 (第二軍第二師団附)、勝木恒喜、平山氏清、上林大三郎、緒方二三、叶寅次、前田彪、松田満雄、片山為佐治、古庄弘、池部秀治 (以上大本営附)、宗方小太郎 (大本営海軍部附) (原籍は略)

1 月 19 日の記事によると、通訳官の数は 200 名内外に達し、前年 10 月 17 日の約 100 名からわずか三ヶ月で倍に増えている。その中でも熊本からはこの時全国でも最多の 37 名が通訳官になっていると誇っている。2 月 24 日の記事でも 1 月末の大本営の名簿にある具体数として 224 名があげられている。熊本と福岡の数が群を抜いているが、恐らくこの 224 名という数あたりが当時国内で求められる通訳者の限界であることは、19 日・20 日の記事に「全国の人略 (ほ) ほ支那語に通ずる者は皆な挙げて通訳官と為し、亦た殆んど遺すことなし」とか、「今は全く其人物を見出さざるに至れり」と述べていることからもうかがわれる。

しかし、前線からは占領地の拡大につれて、2 月 5 日の記事に見られるように 30 名とか 50 名といった多くの通訳官を送れとの要請が切である。こういう状況に際し、大本営が採用した対策は二つである。一つは、2 月 5 日の記事にある如く、野にある中国語経験者を一人でも拾い上げるべく、通訳官の募集ということで、なお試験採用の努力を可能な限り続ける (約 2 ヶ月学習の九州学院の速成科の学生が合格したのを見ると、かなり程度を落としていたと思われる)。もう一つは、どこか適当な学校で新たに中国語通訳者を養成することである。それもできるだけ急がねばならない。

しかし、語学の教育には、人や経験が必要である。そこで大本営が白羽の矢を立てたのが、もと支那語学科を置き中国語教育に伝統がある済々黌などが合併してできた九州学院である。済々黌→漢口楽善堂→日清貿易研究所の人的つながりで熊本県は全国でも一番多く通訳官を供給しているので、人や地の利も問題ない。当時九州学院では明治 27 年 (1894) 度から、九州学院普通部が九州学院から分離独立して、熊本県尋常中学済々黌と称し、私立でありながら県立同様の扱いを受けて再出発していた。このような公的な扱いを受ける済々黌に変則的な支那語学科はもちろん置けない。そこで目をつけられたのは、核であった済々黌がぬけて弱体化し、文・法・医三科 (文・法・医学部を改称) の純然たる私立の専門学校としてやっていかざるを得なくなった九州学院の文科である。明治 28 年 (1895) には法科も閉鎖されている。この学校であれば多少の

無理もきくし、衰勢にある学校の宣伝にもなる。このような理由で九州学院文科の別科として、速成の支那語学科が置かれたと思われる。

設置の詳しいいきさつは、いまのところわからないが、『対支回顧録』（下巻、721頁、松田源太郎君の項）に「宗方小太郎、緒方二三等同郷の先輩が、通訳に膺る者の不足に鑑み、大本営に建議して熊本市の熊本文学館の支那語速成科を設くるに遇ひ、踊躍して之に学んだ。」と記されている。ここに熊本文学館とあるのは、熊本文学館が九州学院の文学部となったので、勘違いがあると思われる。²³⁾しかし、宗方小太郎、緒方二三らが大本営に建議したというのは、彼らの軍部とのかかわり、2月24日の記事に見えるように、二人とも大本営附通訳官を務めていて、通訳官募集の状況を知っていたことから、ある程度首肯できる。

そして、その設置が大本営の肝いりであるということは、九州学院校友会誌『錦溪』第20集（明治28年3月20日発行、38頁）に次のような記事が出ていることから実証される。

●速成支那語科 目下の急に應ずる為め、我文科の別科として設けられる。是を以て四方有為の士集る者殆ど二百五十人、近日広島の本営からは特に通訳官一名を派して其授業を助けられたり。想ふに万里胡城に入りて殊勲を奏する者続々輩出せん。 ●支那語学教師 左の諸氏は学院の支那語学科の教師として燕趙の風雲怒るにも拘らず、硝煙弾雨の間に試むべき鍔腕を収め、教鞭を執られたり。吾人に感謝す。それ戦場に臨むは国家の為め、忠固より忠。然りといへとも戦場に臨むべき人物を養ふも亦忠にして、忠は一なり。通訳官を養成しつ、あるは無形の戦争をなしつ、あるなり。

大本営派遣 勝木 恒吉 熊本県熊本市 東肥合資会社 山賀 喜三郎 熊本県天草郡
東肥合資会社 濱 勉孝 熊本県八代郡 文科三年級生徒 園田 貞彦 熊本県天草郡

1月20日の記事では中国語担当教師は、日清貿易研究所関係者が設立した東肥合資会社の山賀喜三郎一人だけである。それが大本営附通訳官の勝木恒吉が派遣され、濱・園田も加え、四人体制で中国語の授業を行うようになった。これは2月1日の記事にあるように、無試験であることと「時節柄」のため、200名以上の予期せぬ応募者が殺到し、一人ではとても授業ができなかったためである。しかし、その補充の教師を大本営から派遣したことは、大本営が九州学院の中国語教育にいかにか期待し、またいかに通訳官不足が深刻であったかを物語る事柄である。

九州学院支那語学科での中国語速成教育の実態は、「最も簡便の法によりて」「三ヶ月半の期限内に於て普通の言語には通し得るほどの学生を養成」とあるだけで詳しくはわからない。一日の授業時間は午後3時より6時までの3時間、無試験で、仕事の余暇でも受講可能、ということではできるだけ広く受講生を集めようとしたのであろう。募集の状況についてみると、最終的な入学者の数は『錦溪』にもあるように約250名にも達したのではないか。志願者の内容は「多数は長年にして漢学の素修あるもの」で、遠く北は三池から南は下益城から通う者もいた。学習の目的は商業や通訳官（軍事）などである。漢文をやっていれば中国語もなんとかなるのではないかと考えた人が多いことがわかる。

○明治28年3月6日 九州日日新聞 朝鮮語学生募集広告 今般本院に於て朝鮮語学生七十名を限り募集す… 九州学院 *『熊本新聞』にも広告。願書は15日まで。

○明治28年3月27日 九州日日新聞 ●通訳官の出發 先月の試験にて採用されし通訳官の内、池部秀治、叶寅次（二氏は本県人）外三氏は去十六日宇品出帆の小樽丸にて任地に向け出發せり。

○明治28年3月29日 九州日日新聞 通訳官の採用 本年一月より当地の九州学院に於て養成したる支那語学研究生中左の二十氏は今回其試験の結果に依りて、第一回通訳官として大本営より採用せられ、今二十九日春日發三番列車より赴任する筈なり。尤（もっ）とも一同行の広島滞在は一週間位の豫定にて、直ちに從軍渡清の趣なりと云。

山田央, 下田幸八, 松原温蔵, 持木宗像, 柳井忠雄, 松山才四郎, 小川辰五郎, 松田彰澄, 清水秀雄, 久保善太郎, 横田次郎, 篠原祐彦, ○○, 沼田儀四郎, 堀川儀(義)一郎, 山移定政, 本村熊一, 岡部直, 松田源太郎, 本田選 〔『錦溪』21集(明治28年4月30日発行)によると松田彰澄はなく, 山部清熊, 光瀬好の名がある。○○は不明。〕

大本營のてこ入れもあって, 本来3ヶ月半(1月20日の記事)のはずが, わずか2ヶ月にして20名もの支那語学科の学生を大本營の通訳官の試験に合格させ, ただちに従軍渡清させることができた(3月29日の記事)。多分学生の中から優秀な者を撰んで受験させたのであろうが, 修業期間も終わらないで, ただちに出発, 一週間くらいで戦場に送ったことは, 大本營がいかに通訳官不足に悩まされていたかわかる。

中国語の学生募集に遅れて, 3月より朝鮮語学生を募集している。

○明治28年4月17日 日清講和条約調印(朝鮮の独立承認, 遼東半島・台湾の割譲などを決める)

○明治28年4月25日 九州日日新聞 ●九州学院の支那語学科 当春の始めより開始せし九州学院の支那語学科は豫期の如く三月半を以て三十名の通訳官を出し, 其他の成績も非常に宜しく, 愈々本月を以て学期終了とす。去れども向後支那語の必要なるに伴ふて希望者次第に多く, 更に第二期生を募集せざるべからざるに至りたれば, 不日学生募集の挙あるべしと云ふ。尚ほ向後の入学者に対しては, 従来速成法とは少しく趣きを換へ, 商業上等に重きを置くに至るべきかと思はる。又た今回の入学志願者は第一期と異なりて, 将来日清両国の商業上に志ある人なるべければ, 必ずしも三月半の速成を要せざるべきなり。(『熊本新聞』4月20日にも九州学院支那語学科の募集予告)

○明治28年4月27日 熊本新聞 ●通訳官の地位 目下遠征軍隊に随従中なる支那語通訳官は随分多数の由なるが, 愈よ我軍凱旋するの暁には是等軍隊附通訳官一応解任せらるべき筈なれども, 今後新領地の行政事務並に司法軍務執行に付ても必要なるは支那語の通訳官なれば, 軍隊より解任と同時に行政司法の官署に採用する筈なりと。

○明治28年4月27日 九州日日新聞 広告 支那語学生募集広告 今般本院に於て第二回支那語学生百名を限り募集す。年齢十五年以上にして, 志願者は願書(二通)に履歴書を添へ五月七日迄差出あるべし。受業は十日より始む。但願書には熊本市内住居者の保証を要す。但修学期限等詳細のことを知らんと欲する者は学院に問合せあるへし。日限内と雖とも満員の上は願書受理せず。明治廿八年四月廿五日 熊本市九州学院

○明治28年5月26日 台湾島民蜂起, 台湾民主国を宣言。

○明治28年6月7日 九州日日新聞 ●通訳官の帰熊 昨冬来征清軍に従かふて満州の山野を跋涉したる本県出身の通訳官井手三郎, 佐野直喜, 藤森茂一郎, 篠原祐喜, 岡部直の五氏は一昨夕無事帰熊したり。

4月17日, 日清講和条約が結ばれ, 戦争は終わった。集めるだけ集めた通訳官はどうなったであろう。4月27日の記事では通訳官はいったん解任され, 当地の行政司法の官署に採用される筈とあるが, それも全員は必要でなく, 6月7日の記事に見られるように, 従軍した通訳官たちはどんどん帰熊している。また, 5月から始まった台湾鎮圧作戦の方に引き続き従軍した通訳官も多かった。

一方, 九州学院でも, 第1期生は4月末で3ヶ月半の修業期間を終え, 最終的に30名の通訳官を出して学期を終了したと記すが, もう当初の通訳官養成という目標はなく, 5月からは目的を将来の商業上などに置いて, 第2期生を募集している。第2期の募集人員は100名, 修学期間は第1期と異なり, 3ヶ月半の速成は必要がないので, 1年に延長したと思われる。この第2期の中国語教育の実態は今のところよくわからない。明治29年度の『熊本県統計書』の九州学院関係

分を見ると、

学科 文科，武科，支那語学科，朝鮮語学科，数学科

年限 文科三年，武科四年，支那語学科一年，朝鮮語学科一年，数学科二年

となっており、教師は、『錦溪』第22集（明治28年5月31日、44頁）に、「●職員任免 …支那語学教師山賀喜三郎氏辞任せられしを以て橋口吉之介氏之に代り、朝鮮語学教師葉室謹純氏は舎監に兼任せられたり。」と教師の山賀喜三郎は橋口吉之介に交代をしている。憶測は避けたいが、日清戦争が終わると、中国語ブームの一時の熱気は醒め、生徒が思うように集まらなかったのではなからうか。支那語学科も新聞に載るほど注目を浴びたが、戦争が終わると、記事は殆んど見られない。また文科の別科という、変則的な課程のせいもあって、九州学院文学部・文科の卒業生名簿には、先の試験に合格して通訳官となった20名の名すら掲載されていない。九州学院は衰退の一途をたどり、明治30年（1897）3月31日には閉院した。

○明治28年7月31日 九州日日新聞 ●通訳官の病死 当地九州学院に於て支那語科を修め、本年四月通訳官に採用せられたる八代郡宮原沼田儀四郎、球磨郡四浦村本村熊一両氏は六月旅順に至り、同月十一日より台湾淡水港に至り、事務に従ひしが、本月中旬沼田氏は腸胃カタルに罹り、本村氏は虎病に襲はれ、終に病死せり。両氏春秋に富み前途尚ほ多望なるに、惜むべき事なり。

○明治28年8月6日 陸軍省、台湾総督府条例制定。

○明治28年8月 同窓生従軍消息 井上良蔵、佐竹令信、清水秀雄の諸氏外二十余名の本院出身通訳官は戦後猶旅順口に駐在せしか、今度新に台湾総督府附を命ぜられ…（『錦溪』第24集、明治28年8月26日）

○明治28年9月27日 九州日日新聞 ●故右田通訳官に関する書信 去十六日基隆発稻田初太郎氏の書信に曰く、通訳官右田亀男氏は渡台未だ三週日を出ず、急性腸答兒（カタル）に罹り、昨十五日午後総督府内に於て敢へなくも死去せられたり。……氏臨終の時に際し、勲章及び南征従軍の辞令等を賜はり、後ち従容として瞑目せられ候云々とあり。

○明治29年3月12日 ●通訳官の戦没者追吊会 *根津一、荒尾精が発起人となり、3月11日、漢口樂善堂で死亡・行方不明となった石川伍一、浦敬一、広岡安太及び日清戦争の際通訳官としての朝鮮又は戦没病死した23名の霊を祭る追吊会を東京湯島新花町靈雲寺で開いた。

○明治29年5月12日 ●通訳官の行賞 *明治29年3月31日附で、叙勲七等授青色桐葉章（年金六十円下賜）から叙勲八等授宝章（金三十五円下賜）まで、それぞれの褒章ごとに、合計209名の名前があげられている。一番人数が多いのは叙勲八等授白色桐葉章（金五十円下賜）の64名である。清国との戦争は終わったものの、先に述べたように清国から割譲された台湾では独立運動が起り、それを鎮圧するために軍が派遣された。通訳官の中には引き続き従軍する者も多かった。しかし、この作戦ではコレラやマラリアなどの病気にかかって、死ぬ人も多かった。熊本からの通訳官で戦病死した通訳官は藤城亀彦・武藤巖彦、右田亀雄、沼田儀四郎、本村熊一の5名である。明治29年（1896）5月12日の記事に見られるように、209名の通訳官に褒章が贈られているが、これに戦病死者は含まれていない。

ここまで日清戦争における通訳官召集の状況、その熊本での状況、九州学院支那語学科の設置の状況などについて、新聞雑誌の記事をもとに記述、考察してきた。こうして全国から集められた通訳官の数は、明治28年2月24日の九州日日新聞の記事では、224名。『明治二十七八年日清戦史』によると、最終的に通訳官の総数はほぼ278名（少数の英語通訳を含む）とされている。²⁴この人数を明治20年代当時として、「たった300名足らず」と見るか、「300名近くも」と

見るかはいろいろ見解の分かれるところであろうが、注目されるのは通訳官の出身母体である。日清貿易研究所、興亜会支那語学校、外国語学校、東洋学館、熊本九州学院支那語学科などさまざまであるが、なかでも圧倒的多数を占めるのは、およそ120名もの通訳官を出したとされる日清貿易研究所関係者の集団である。

日清貿易研究所関係者が通訳官募集に協力したのは、荒尾精と軍部との関係から必然の成りゆきであった。「参謀本部次長川上操六は、荒尾および荒尾の盟友根津を通じ、日清貿易研究所卒業生を通訳として従軍するよう求めた」²⁵⁾し、荒尾の方でも「当局に薦めて、漢口楽善堂時代の同志及び日清貿易研究所出身の士を通訳として従軍せしめることとし、それらの士の奮起を促したところ、一斉に起ちて軍国の務めに服することを希望し、旧同志19名、卒業生72名が陸軍通訳に任ぜられ、夫れぞれ戦地に赴いて活動したのである」²⁶⁾と、全面的に協力した。

日清貿易研究所関係者120名と九州学院支那語科出身の30名(『九州日日新聞』明治28年4月25日の記事による)を合わせると、全通訳官の半数以上が済々黉、漢口「楽善堂」、日清貿易研究所、九州学院とつながる人脈から供給されたことになり、当時においてこの系譜につながる人達の戦争に果たした役割(政治家や軍部に対して)、或は日本人の中国観形成に及ぼした影響など無視できないものがある。

通訳官の出身地については、明治28年(1895)1月18日の記事で熊本が37名で「全国第一等」と述べている。2月24日の記事を見ると、224名中、九州出身者が実に123名、熊本と福岡がやはりその半数を超す。これについて佐々博雄氏は「単に近いという地理的關係ばかりでなく、日清貿易研究所設立までの清国と九州の關係が影響していたものと思われる。」と述べている。²⁷⁾

では熊本では最終的にどのくらいの数の通訳官を送ったのであろうか。これまで「清国ニ於ケル肥後人」によって、52名とする説が多かった。しかもその全員の名前も分明でない。そこで『九州日日新聞』の明治28年2月24日の記事、「清国ニ於ケル肥後人」、『錦溪』、佐々博雄「日清戦争と通訳官」、『対支回顧録』、『東亜先覚志士記伝』、『済々黉百年史』などにより調査し、出身母体別にあげてみると次のようである。(他県本籍で熊本の学校出身者も含む)

済々黉・九州学院(支那語学科以外)出身者 27名(下線は日清貿易研究所出身者・関係者, 14名)

*宗方小太郎, *井手三郎, 深水十八, *緒方二三, *佐野直喜, *前田彪, 片山敏彦, 藤森茂一郎, 糸川直元, *松田満雄, 牧相愛, 井口忠次郎, 本島正礼, 平山氏清, 右田亀雄(病死), 赤峰邦弥太, 藤城亀彦(馬賊と間違われ戦死), 池部秀次, 篠原由雄, 奥村金太郎, 鳥居赫雄(素川), 古庄弘, 武藤岩彦(病死), 森川省三郎, 川村景敏(九州学院), 井上良蔵(九州学院), 佐竹令信(九州学院) *は漢口楽善堂

日清貿易研究所出身者・関係者 4名

勝木恒喜, 松倉善家(文学精舎), 岩崎博隆, 藤本(三池)親信

九州学院支那語学科出身者 20名(『錦溪』21集[明治28年4月30日発行]による)

山田央, 下田幸八, 松原温蔵, 持木宗像, 柳井忠雄, 松山才四郎, 小川辰五郎, 山部清熊, 光瀬好, 清水秀雄, 久保善太郎, 横田次郎, 篠原祐彦, 沼田儀四郎(病死), 堀川義一郎, 山移定政, 本村熊一(病死), 岡部直, 松田源太郎, 本田選

その他・不明 11名

上林大三郎(興亜会支那語学校), 熊谷直亮(津田静一の実弟, 共立学舎), 高道梅雄, 柳原又熊, 森安次, 叶寅次, 中島裁之, 徳丸作蔵(興亜会支那語学校), 片山為佐次, 井原真澄(五高), 栗林次彦, 八木茂

合計62名が氏名が確認できた熊本関係の通訳官の数である。九州日日新聞の明治28年4月25

日の記事では「九州学院の支那語学科は…三十名の通訳官を出し」とある。氏名がわかった20名に10名を加えると72名に及ぶが、いまのところこれを確かめるすべはない。

それにしても、62名のうち、済々黉・九州学院・日清貿易研究所関係者は実に51名にも及ぶ。その他上林大三郎も済々黉の中国語の教師であった。熊本においてこれらの学校の出身者が古くから、深く、広く中国・中国語と関わり、全国に先駆け、中国に進出してきたか確認できる。「清国ニ於ケル肥後人」においても「当時全国ノ支那語ニ通スル者ハ悉ク召サレテ通訳官ニ命セラレテ従軍セシカ、其内我熊本出身者ハ実ニ左ノ多数ヲ占メタリ（24名の名前〔省略〕）其他十八人、総員五十二名、我熊本人カ多年力ヲ清国ニ用ヒシモノ此に至ッテ始テ英華ヲ吐キシヲ見ル可キナリ」とそのことを誇っている。

戦争における通訳官というのは自分が学んだ言語を、その言語を使用している国や人との戦い統治（軍事・民政）のために役立てることだから、語学が一番不幸な使い方、本来ならさまざまな葛藤があるはずなのだが、彼らの多くはそのような暗さはあまり見られない。もともと強烈な国権意識に支えられ、軍部とも結びつき、語学を学んできたわけだから、「お国のために自分の能力（語学）が役立てられる」通訳官は、むしろ「支那語学を修めて清国に向て為すあるの準備を為さんと」（佐々友房「支那語科を設けしに就いての談話」²⁸⁾）してきた人たちにとって、語学の実用の一方の極みであって、多くの通訳官を輩出したのはむしろ晴れがましいことであった。

語学の実用のもう一方の極みは平和時における貿易（商用）である。九州学院支那語学科は戦争中に急遽通訳官の養成のために設置されたけれど、戦争が終わって、第2期生の募集になると、その目的が「商業上」にあっさり変えられているのは、中国語が当時から実用的な「特殊語学」として扱われていたことの典型的な現われといえよう。したがって中国語教育も「普通の言語には通じ得る」、則ち会話に力点が置かれた。

ところで、熊本では上述のように、日清戦争では多くの通訳官を出したのだが、これらの通訳官のその後を調べてみると、一部の人は東亜同文書院設立に関わったりして影響力をなおも持ち続けるが、晩年は不遇であった人も多い。「大陸浪人」「志士」などと呼ばれ、中国進出に先導的役割を果たしてきた熊本県人も、後年になって国家自体が中国進出（侵略）に組織的に乗り出してくるにつれて、その役割が薄れてしまったと考えられる。それにつれて、熊本が中国と関わる地域性も少しずつ薄れていく。明治34年（1901）設立で、宗方や井手が関わった東亜同文書院の卒業生名簿（明治41年5月21日調）を見ると²⁹⁾、その第1期から第4期（明治37～41年）卒業生合計168名のうち、熊本出身者はわずか8名に過ぎない（福岡も8名）。漢口楽善堂や日清貿易研究所と比べると、熊本県人・福岡県人の占める割合が大幅に減っている。

日清戦争中は、九州学院支那語科の募集に200余名も殺到したのでもわかるように、民間でも中国語ブームがおこった。

○明治28年2月9日 九州日日新聞 ●支那語学の研究 市内京町地方の有志団体なる土曜会にては、本月初より支那語の必要を認め、毎日昼夜同団体の倶楽部に於て、専ら其の講究に勉め居る由なるが、教師には先年支那語の通訳たりし六間町長江文正氏にして、受業者数十名の多きに達したりといふ。

○明治28年3月1日 九州日日新聞 ●支那語講習会の発会式 熊本商工青年会員諸氏が發起せし官俗支那語講習会は、… *講習の申し込みは50名を超えた。7月20日同紙に卒業式（修了25名）の記事。

○明治28年6月23日 九州日日新聞 ●日清貿易に従事する人の注意 明治二十年来清国に居り、能く其事情に通じたる吉島俊明氏の談によれば、日本人にして従来支那貿易に従い利益を得たるものは殆ど絶無にして、能く数十年間継続して信用を増し利益をも見るものは僅かに上海三井物産会社其他

数店に過ぎざるべし。而して其の此(かく)の如く皆失敗するは全たく資本及び忍耐力の欠乏等大原因なるも、また彼の国の人情風俗を知らざること一原因なり。日本人は自己の心を以て清人の心を付度し、新事物を好むべく、何事も便利にして廉価ならば売れ行く品質の堅牢よりは外形の華麗なる方需用多からんと思ふが如きは甚だしき誤謬にて、清国人が保守主義に富むは実に驚くべきものあり。衣服の色彩模様等は容易に之を採用せざるのみならず、頗る縁起を唱へ、蝙蝠の模様は福として悦び、白色は不吉として嫌ふが如きは其の一端なり。殊に近頃は日本人中戦時に因みある商標を用ふるもの多きが、此等の商標を以て支那内地に売込まんとするが如きは大失敗の基にて、支那人は如何に便利なりとも之を買はざるや必せり云々。

研究会や講習会が盛んに開かれ、多くの受講生を集めている。これらはおおむね毎夜7時から2時間、3ヶ月といった短期間のもので、もっぱら商売上の目的で学ぼうとするものであった。しかし、日本人の対中国の商売はうまくいかなかったものが多かったらしく、6月23日の記事のような警告も見える。民間の研究会や講習会は日清戦争が終わって暫くすると、一時のあだ花のように消滅していった。

以上、東肥合資会社や九州学院支那語学科の設置の経緯や実態を、熊本県人と中国との深いかわりに関連付けて明らかにしてきた。その結果、1) これらの会社や学科は、明治20年代、熊本県政を圧倒的多数の議員で動かし、国権拡張主義をとる紫冥学会(熊本国権党集団)の強い影響下で設置された。2) 東肥合資会社は挫折したのではなく、日清貿易研究所卒業生の受け入れ母体として、また紫冥学会の実業部の一つとして、特に中国進出に積極的な役割を果たしていた。3) 九州学院の速成支那語学科の設置の背景や状況。4) 日清戦争に熊本から従軍した中国語通訳官の名前・出身学校・人数など当時熊本で中国や中国語に関わってきた人達の全容。等々がかなり明らかになった。

それにしても日清戦争では中国語通訳官が極端に不足した。しかも通訳官の多くが日清貿易研究所や済々黻・九州学院の出身であり、福岡・熊本を中心とする九州出身であった。これは明治10年代・20年代におけるこれらの学校や地域が日中関係に果たした役割、影響力が当時いかに大きかったを示す事柄であろう。これは日清戦争後の日中関係や中国語教育を考えていく上でも、様々な手がかりを与えてくれる。

(続く)

注

- 1) 『熊本大学教育学部紀要』人文科学, 第48号, 1999年。
- 2) 「壬午軍乱」は朝鮮の王妃閔氏一族の政策に不満を持つ国王の父の大院君らの反乱。これに介入して日清両国が出兵した。「甲申政変」は朝鮮の京城で金玉均ら改革派(親日派)が閔氏政権に対しクーデターを起こして失敗した事件。
- 3) ここに述べる九州学院と現在熊本市にある九州学院高等学校とは全く別の学校である。現在の九州学院高等学校はルーテル教会系の学校として、明治44年(1911)に創立した。
- 4) 佐々博雄氏は佐々友房らが創立した天皇中心主義、国権拡張主義などを標榜する紫冥学会(明治22年熊本国権党を結党)系の人達を「熊本国権党系集団」とか「熊本国権党系大陸実践集団」などと呼んでいる。佐々博雄「日清戦争後における大陸「志士」集団の活動について—熊本国権党系集団の動向を中心として—」(『国士館大学文学部人文学会紀要』第27号, 平成6年)など。
- 5) 漢口「楽善堂」や日清貿易研究所に関しては、次のような参考文献がある。

- 井上雄二『巨人荒尾精』, 佐久良書房, 1910年. ○野間清「日清貿易研究所の性格とその業績—わが国の組織的な中国問題研究の第一歩—」(『歴史評論』167号, 1964年). ○鈴木健一「日清貿易研究所の教育思想」(『歴史学と歴史教育』第1号, 1971年). ○黄福慶「甲午戦前日本在華の諜報機関—論漢口楽善堂与上海日清貿易研究所」(『中央研究院近代史研究所集刊』第13号, 1984年). ○汪輝「日清戦争前日本の対清人材教育—荒尾精と上海日清貿易研究所—」(『広島東洋史学報』第3号, 1988年). ○佐々博雄「日清貿易商会構想と日清貿易研究所」(『多賀秋五郎博士喜寿記念論文集アジアの教育と文化』, 巖南堂, 1989年). ○佐々博雄「熊本国権党系の実業振興策と対外活動—地域利益との関連を中心として—」(『国士館大学文学部人文学会紀要』第24号, 平成3年)
- 6) 「清国ニ於ケル肥後人」は, 明治32年3月, 井手三郎が佐々友房の依頼により書いたもの. 国立国会図書館憲政資料室所蔵「佐々友房関係文書」所収.
 - 7) 精鑄水はヘボン式ローマ字綴りを創始した米国人医師ヘボン博士から岸田吟香が伝授されたもの. 岸田吟香はこの点眼薬を販売するため, 東京日日新聞(後の毎日新聞)をやめ, 明治10年東京銀座に「楽善堂」薬舗を開いた. 翌11年には上海に進出し, 支店を開設した.
 - 8) 軍部と中国・中国語に関しては, 戸部良一『日本陸軍と中国—「支那通」にみる夢と蹉跎』(講談社, 1999年)や六角恒廣「陸軍参謀組織と中国語」(『中国語教育史拾遺』, 不二出版, 2002年)がある.
 - 9) 中下正治『新聞に見る日中関係史』, 研文出版, 1996年, 68頁.
 - 10) 東亜同文会編『対支回顧録』下巻, 503頁.
 - 11) 宗方の帰熊は, おそらく漢口楽善堂を通じた紫冥学会及び九州地域と清国との貿易振興を目的とした帰省であったと思われる.(佐々前掲論文「熊本国権党系の実業振興策と対外活動—地域利益との関連を中心として—」, 48頁)
 - 12) 彼らが収集した調査資料は明治22年5月, 荒尾精が参謀本部に提出した『復命書』と題する偵察報告や, のち明治25年, 日清貿易研究所が編んだ『清国通商総覧—日清貿易必携』にうかがわれ, 日本の対中政策, 中国研究の基本資料とされた.
 - 13) 佐々博雄同前12)論文, 49頁.
 - 14) 日清貿易研究所の教育については, 汪輝「日清戦争前日本の対清人材教育—荒尾精と上海日清貿易研究所—」(『広島東洋史学報』第3号, 1988年), 六角恒広『中国語教育史の研究』(東方書店, 1988年)の第2章「日清貿易研究所」を参照.
 - 15) 日清貿易研究所の第一期卒業生は, 89名と記録されている.(『東亜同文会史』, 霞山会, 昭和63年, 14頁). 『日清貿易研究所沿革史』(東亜同文書院学友会, 明治41年, 23頁)によると, 77名.
 - 16) 『克堂佐々先生遺稿』(佐々克堂先生遺稿刊行会, 昭和11年, 598頁「第五編 追憶」)に引く, 緒方二三「対支経済事業へのご尽力」.
 - 17) 佐々博雄前掲論文「日清貿易商会構想と日清貿易研究所」375頁.
 - 18) 「なおまた本餐(済々餐)では, 当時(日清戦争時)とくに臨時清語学科の速成教習生を募り, これを啓導して, 戦役中公事に従事せしめた者が六十余人に達したのであった」(『済々餐百年史』89頁. 『多士』創立三十周年記念号(明治四十五年刊)の『済々餐歴史』による). 「この時(日清戦争時), 津田静一は熊本文学館に中国語科を特設し, 数十名の通訳官を急造して戦地へ送った」(『熊本県史』近代編第三, 696頁).
 - 19) 安藤彦太郎『中国語と近代日本』, 岩波新書, 1988年, 102頁.
 - 20) 佐々博雄「日清戦争と通訳官」(『日清戦争と東アジア世界の変容』下, ゆまに書房, 1997年, 374頁). 佐々氏が引用した資料は, 参謀本部編纂『明治二十七八年日清戦史』第七・八巻, 東京印刷株式会社, 1907年によっている.
 - 21) 九州学院の成立事情や性格については, 上河一之「明治中期における中等教育機関の党派的性格について—九州学院の成立を中心として—」(『熊本女子大学学術紀要』第31号, 1979年5月)が参考になる.
 - 22) 水野公寿「佐々友房論の変遷」(『史叢』第7号, 2002年, 4頁)に茅原崑山の『人物評論』の佐々友房評として引いたもの.
 - 23) 熊本文学館は佐々友房らと紫冥会をおこした津田静一が明治22年に創立した私学である. 創立2年後に九州学院文学部となったが, 両校は教職員・生徒ともそのまま移っているので, 関係者はただ名称が変わっただけだという一体感があったようだ(これは済々餐関係者も同じ). 津田静一先生二十五回忌追悼会『榎溪津田先生伝纂』(稲本報徳社, 昭和8年11月)に載せる卒業生名簿も「熊本文学館, 九州学院文学部, 全文科生徒名簿」となっている. 支那語学科を置いた学校名の混乱もそのあた

りが原因になっていると思われる。

- 24) 前掲 20) 佐々論文, 380 頁.
- 25) 六角恒広『中国語教育史の研究』, 東方書店, 1988 年, 308 頁. 川上操六は前述したように日清貿易研究所の設置について, 資金援助に多大の労をとった人物である.
- 26) 「楽善堂志士及び貿易研究所出身者の従軍」(黒龍会編『東亜先覚志士記伝』上巻, 昭和 41 年, 原書房, 426 頁).
- 27) 佐々氏は前掲 21) 論文「日清戦争と通訳官」で, 「日清貿易研究所生徒名簿」と, 乙未同志会 (のちにこの会を母体として, 近衛篤磨を会頭とする「同文会」が設立された) の「乙未同志会会員名簿」の二つの名簿により, 通訳官の個人名やその構成と出身について検討している.
- 28) 『克堂佐々先生遺稿』, 佐々克堂先生遺稿刊行会, 昭和 11 年, 212 頁.
- 29) 『日清貿易研究所沿革史 付録』(東亜同文書院学友会, 明治 41 年 6 月).